

## 学生の体験活動の効果と限界：20年の活動を中心に して

軸丸, 勇士  
大分大学教育福祉科学部

伊藤, 安浩  
大分大学教育福祉科学部

<https://doi.org/10.15017/19975>

---

出版情報：生活体験学習研究. 9, pp.13-22, 2009-01. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：

## 学生の体験活動の効果と課題

—20年の活動を中心にして—

軸丸 勇士\* 伊藤 安浩\*

### The Effects and Problems of Experiencing Volunteer Activities for Students

—Through the activities for 20 years—

Zikumaru Yushi · Ito Yasuhiro

**要旨** 最近の高校生は野外で遊んだ経験が少ない上に、学校では実業系を除き理科実験は殆ど行わずに、机上の学習に終始している。その様な時代と環境の中で育ち、試験に合格し入学してきた教員養成系の理科専攻や理・工学部の学生でさえ、ボタンやスイッチ操作をすることが実験だと思いこんでいる者もいる。

この様な体験の少ない学生達から派生する各種トラブルを解決するため20年前から地域に出向いて色々な体験活動を行ったところ多くの得るものがあった。ここではその活動内容や手法を紹介すると共に、それを行う際の支援の仕方や関わり方、これらを含めたプログラムのあり方、その効果や課題等について生涯学習と体験学習の観点から述べる。

**キーワード** 遊び、希薄化、体験学習、実践、大学生

**Abstract** Senior high school students these days have very few experiences of outdoor activity. Furthermore students, except for those at vocational high schools, are absorbed in book learning instead of conducting scientific experiments. Some science major students in a faculty of education and some in an engineering faculty, who have been brought up in such an environment and have even passed the entrance examination and entered a university, assume that to do a scientific experiment is merely to push a button or to operate a switch.

In order to solve various troubles brought about by university students who have few such experiences, we have gained much by visiting local areas these twenty years and having our students conduct experiencing activities. Together with introducing the contents and the method of those activities, we will describe how to support them from the points of view of lifelong learning and experiencing learning. We will also describe how we can concern ourselves with training their leaders and persons capable of bringing together leaders and children. We shall examine what those programs including these items should be and the efforts and the tasks needed for those activities.

**Key words** playing, poverty of experience, learning through experiences, practice, university students

---

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

\* The Faculty of Education and Welfare Science, Oita University (大分大学教育福祉科学部)  
700 Dannoharu Oita City, Japan 870-1192 (〒870-1192 大分市旦野原700)

## I. はじめに

### 1. 学生の実状

筆者等は昭和60(1985)年頃から入学してくる学生の我が儘でやる気がなく、複数でなければやれない実験でも役割分担や協力して取り組まないこと(例えば、次回の実験は3人で分担しながら〇〇の測定をすると予め決めておいても何の連絡もなく黙って休んだり、遅れてきて他の者に迷惑を掛けても平気な顔をしている)。また、何とか実験データだけはとつても測定後の機器や装置の片づけをしない。さらに、機器を壊しても知らん顔、おまけにその原因を友人や物のせいにする。限界を超えて無理に力を加えたり、道具の使用法は間違っていたり、知らないのに我流で使い装置や器具を駄目にする。固定や設置の仕方が悪いため上手く結果が得られなかったり、逆に何とか得てもデータの誤差が大きければ装置が悪いからだとか、機器や他の実験者のせいにする。この種の様々なトラブルが年々増えてきた。

それ故、共同や連携して実験することの重要性を説明し、一人よりも複数の目で見るとの意義やその折の誤差などについて解説を行った。同時に如何に真実を掴むために細心の注意を払い正確なデータを得るか。それを通して実験の楽しさや面白さを伝えるかを模索した。また、実験でしか得られない喜び、真理探求の夢、それに伴う困難や忍耐強く取り組む姿勢の大切さ等を理解させることに努めた。しかし、予期したような効果は認められなかった。だが、その話と並行してやる気のない学生達の興味を喚起するためアンケートや希望調査を実施した。これにも半数の者しか回答が得られなかったが、数回の調査結果からそれなりの要因や学生の傾向が次第に判ってきた。

また、その頃から理科(科学)関係の学会で話題になり、社会問題となり始めたのが「理科離れ」であった<sup>1)</sup>。そのため筆者等は色々な観点から、大分県下の小学生～大学生の合計1.1万人を対象にした調査を行い原因把握に努めた<sup>2)</sup>。その結果、学校から帰って直ぐ学習塾や習いごとに行くため遊び時間そのものがなく、その上多くの異年齢者が集まって戸外で遊ぶことが皆無に近かった。その頃の遊びと言えば室内でのパソコンやゲーム機が主流になってきた(低価格で購入ができ、各種機種やソフトが揃い始めた)時でもあった。

更に高等学校では実業系を除き理科実験は殆ど実施せず、机上の学習に終始している。そのため入学してきた理科専攻の学生ですら、パソコンを用いたボタンやスイッチ操作をすることが実験だと思いこんでいる者さえいる。その様な体験の少ない学生達が実験を行うことで各種トラブルが多発してきたのであった。

その原因の幾つかが判ってきたので、その解決策として試みたのが、地域に向いての各種体験実習であった。それは学生の履修単位にはならず、衣服や手足を汚し、場合によっては重労働であるのにも関わらず、彼等は不平を言うでなく、結構協力しながらそれなりの作業を行うのであった。その体験実習を最初は半日、次回は1日と増やしていき、宿泊を伴うようにしたところ一層興味を持って取り組むようになってきた。それに意を強くした筆者等は最低でも年に数回の様々な体験活動を行うことにした。そしてその折には必ず宿泊を組み込んだプログラムを実施した。

その場合の宿泊場所の1つは、体験受け入れ先となるべく児童生徒の居る家をお願いしホームステイとした。それは学生もステイ先も兄弟姉妹が少ないので多人数の家族を体感して貰うことと、児童生徒が学校で理解できてない箇所の学習指導を兼ねて行うためであった。もう1つは、参加者全員が宿泊できる学校や地域公民館などの大型施設であった。その目的は協働作業による役割分担と寝食を共にすることで友人や学友の性格や素晴らしさの再発見、協同生活上のルールなどを修得させるためでもある。そして体験活動の後から実験を行うような時間割の組み方をすれば、前述の各種トラブルは殆どないことも判ってきた。以来、学外での体験活動を継続して行い20余年が経過した。

その間に文部科学省は各種体験活動を奨励した。特に教員養成系学部には平成9(1997)年フレンドシップ事業(以下F S事業という)予算を計上して、大学主導による小中学生を巻き込んだ体験事業を開くことを奨めた。筆者等はこれまでに多くの事業実績とその手法を持っていたので真っ先に多額の予算を獲得し、多い時には20余種類の事業(年に日数にして約50日)を実施した<sup>3)</sup>。その手法は全国に広がり現在では特徴あるF S事業が各大学で実施されている。ここではこれまでの体験活動(F S事業を含めて)と手法を紹介する。

その種の経験を経た当時の卒業生は今や職場でなくてはならない地位まで成長している者もいる。その中で教師として学校に勤務している者は環境教育や生活科、総合学習の時間の指導には殆ど困らないという。この他、この種の経験をして卒業した学生がそれぞれの職場や社会で、この学生時代に参加した体験活動について、どのような感想や意見を持っているかを年度毎の1名に平成20（2008）年7月に問うた。その結果、10人程から回答を得た。その内容はどれも前向きなものばかりで、3例を後に記載する。

更に、ここでは体験活動に関する事業を行う際の支援の仕方や関わり方、そのための指導者、指導者と子どもを結ぶ人材、これらを含めたプログラムのあり方、その効果や課題等について体験学習の観点から述べる。

## 2. 政策として

上述の様な社会状況の下で文部科学省は様々な施策を実施した。最近の主なものを年次別に見ると、平成9（1997）年、特に教員養成系学部にはF S事業予算を計上した<sup>3)</sup>。これは教職を志す学生が種々の体験学習等において児童生徒と直接ふれあい、共に学ぶことにより、教員としての実践的指導力の向上を図るのを目的としたもので、現在も継続している事業の一つである<sup>3)</sup>。

平成10（1998）年、中央教育審議会は学習指導要領を改訂し、「ゆとり教育」や「生きる力」を育てることを目標に「総合的な学習の時間」を新たに導入し、週休2日制を採用した。そのため授業時間数は減少し学習内容が精選されると共に高学年へ移行した。

平成13（2001）年、学校教育法及び社会教育法が改正され、各学校等がボランティア活動等の社会奉仕活動や自然体験活動など、多様な体験活動に努めることが規定された。

平成14（2002）年7月、中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」が出され、青少年の時期には学校内外における奉仕活動・体験活動を推進する等、多様な体験活動の機会を充実することが必要であると提言された。それらを受けて、平成14（2002）年度より「豊かな体験活動推進事業」を実施し、各都道府県に「体験活動推進地域・推進校」を指定して他校のモデルとなる体験活動の推進を図っ

た。

平成15（2003）年度には、都市部から農山漁村や自然が豊かな地域に出向き農林漁業体験や自然体験を行うなどの、異なる環境における体験活動促進のための「地域間交流推進校」を指定した。

更に、平成16（2004）年度からは長期にわたる集団宿泊等の共同生活体験を行う「長期宿泊体験推進校」を指定し、これらの各種体験により得られる多くの豊かな資質（人間性や社会性など）を期待した。

ここに挙げたものは文科省や他省庁と連携した事業もある。これらの事業からの資金援助や推進校方式による啓発により、地域や学校が連携した特徴ある様々な形の体験活動が行われるようになってきた。その結果、児童生徒だけでなく、最初は「総合学習の教科書や指導書がないからできない」と言っていた教師達も、次第に名人・達人や各種インストラクター等の支援と協力を得ながら手法を修得し、地域に在る教材を活用しながら工夫を行い、指導や活動が比較的容易くできるようになってきた。更に、他の事業により多くの体験活動が実施された。そのため筆者等も幾つかの事業に関わってきた。これらは国として体験活動の重要性とその方向性を示したものであった。

しかし、平成18（2006）年に実施されたOECDによる生徒の学習到達度調査（PISA）結果から、参加国57の中で科学的リテラシー6位、読解力15位、数学的リテラシー10位とこれまでの2回に比べて学力が低下傾向にあることが判った<sup>4)</sup>。そのためやっと定着しかけた総合学習や体験活動の時間が平成20（2008）年の学習指導要領の改訂で減少している<sup>5)</sup>。また、指導要領の早めの実施に向けた動きも出ている。

その様な時代背景の中で生活体験の必要性について、ここでは20余年に亘り大学生に実施してきた体験活動により得た幾つかの効果と実施方法についてその概略を述べる。それを通して今後の体験事業のあり方や、所謂先人達が長い時間をかけて培ってきた生活の知恵の継承のための方策を伝える資とする。

## II. 実践例

近年は保護者の職業が1次産業である子弟であるのにも拘わらず、その作業体験をしてない者が9割以上を占めるようになってきた<sup>2,5)</sup>。更に、前述I-1)の



様な学生の実状を打破するために始めたものであった。この体験事業を行うことで、参加者が希薄となった人間関係の再構築と汗を流しながら生活の知恵の獲得、連携協力することの大切さや大事さ等を少しでも得られるようにした。それにより色々な関わり方や見方考え方を自然環境や社会、人などの観点から学んで貰うことに主眼を置いたものである。

表1 昭和末期頃の年度別体験作業と日数

年度(西暦)	体験事業内容	日数
昭和61(1986)年	植林、田植え、草刈り、豆腐作り、枝打ち間伐	5日
62(1987)	春田鋤き、糶まき、草取り、蒟蒻作り、稲刈り	8日
63(1988)	老人介護、植林、下草刈り、干魚作り、脱穀他	9日
平成1(1989)	伐採と運搬、木工、田植え、麦刈、梨の収穫他	11日
2(1990)	山焼き、山拵え、物品販売、トマト植えつけ他	12日
3(1991)	植林、棚田補修、田植え、タバコ葉収穫、枝打	12日

体験活動を始めた頃の作業内容を表1に示す。この作業(種類や内容)は主として筆者の人脈を生かしたもので、その体験作業や指導が可能な方々に依頼しての実施であった。そのために系統的且つ段階を追ったものではない。いわば、学習指導要領の内容を10年程早く学生に実践させたものである。これを最近の言葉を用いて換言すれば「大学生版田舎体験」や「大学生版地域間交流」である。更にここ数年の傾向として団塊世代の退職者や田舎暮らし体験で盛んになってきた「グリーン・ツーリズム」とも言えよう<sup>6)</sup>。

表1の作業は比較的实施期間も1回当たり半日~1日と短く、その体験作業内容も現在のものと比較すると簡単なものである。それでも参加した学生達はそれなりに苦勞があったようだ。しかし、この体験作業の内容や種類は実施年度や時期、場所等によって異なるが、作業そのものが毎年実施され恒例化するに従い、先輩から後輩へと有形無形の話や手法の伝達が行われていった。その結果として、年次進行と共に体験の種類と内容が充実していくこととなった。ここにも継続することの大切さと取り組み姿勢の有用性がみられる。



図1 山に入り農業用水路の整備を行う

平成15(2003)年以降の各種体験活動を表2に示す。ここに挙げたものの中から諸条件を考慮し、年により実施内容を組み合わせて実施する。1年に1種類(例えば山作業つまり、山拵え、植林、下草刈り、枝打ちと間伐等)は必ずシリーズものとして体験させ、それにより全体の流れを掴めるように工夫している。従って、学生が4年間の在学中に全部の事業に出席したとすれば、少なくとも4種類のほぼ全体の体験内容とその時期に行うべき作業の流れについて体験できることになる。この他に、年度毎の単発事業は10回以上実施するので合計15回、日数にして20~25日にもなる。これらの事業は見かけ上の回数は少ないが、宿泊を伴うので内容的には結構な作業経験となっている。

表2 最近数年間の体験作業

主な体験事業内容
食品加工:米、麦、そば、豆腐、蒟蒻、干魚、海苔、大根、芋、甘酒、饅頭、山菜等
山林関連:山拵え、植林、杉穂摘み、下草刈、枝打ち、間伐、炭釜作り、炭焼き、薪割、竹林伐採、搬出、木材加工、椎茸栽培、茅小屋作り、牧草作り、野焼き等
農業関連:水路補修、耕耘、畝切り、種まき、植え付け、間引き、除草、温室補修、予防、受粉、誘引、剪定、袋掛け、収穫、選別、箱詰、保存、茶摘み、防虫、搾乳、給餌、敷き藁交換、運動、毛掛け掛け、堆肥作り、糞尿処理、施肥等
漁業関連:巻き網船作業、養殖(魚、蠣、真珠)、海苔採取、生けす補修、漁場清掃等
その他:老人介護、物品販売、案内、首相講演会主催、福祉映画上映、監視等

\*人数や時期、年により上記の中から組み合わせて実施する

これらの体験事業を実施する場合、受け入れ先との打ち合わせ（日程、実施場所、人数、内容、方法、宿泊場所、食事の方法、移動手段、道具、持参品など）は、予め確実にしておくの言うまでもない。その際、雨天時の代替や怪我などの安全対策まで協議しておく必要がある（その詳細については余白の関係からここでは省略する）。

### Ⅲ. 結果と効果

#### 1. 学生の場合

この体験事業を始めた初年度の作業は2～3種類と少なく、そのうえ日帰りとし、実施日数も通算して数日である。そのせいか、参加した学生達が物足りなさを訴える有様であった。それ故、次年度からは宿泊を伴う形にし、食料の調達から食事の準備、片づけまでを参加者が役割分担しながら行う（寝食を共にする）ことで、学生間の意識高揚と連携・協力することの大事さを実感することとなった。又それによりこれまで判らなかつた参加者の得意とすることや個性の再発見に繋がって人間関係の再構築となっていた。この体験事業を始めて3年目になると、それまで多発していた実験の際の遅刻や欠席、整理や片づけなどが指示されるでなく自ら進んで行われるようになった。同時に機器の損傷も減少し、操作も注意深くくなっていくと共に、物を大事に扱う習慣や道具も丁寧に適材適所で用いる姿勢が育っていくのがはっきりと見てとれるようになってきた。



図2 昔ながらの手植えによる田植え

それに意を強くした筆者等は更に体験の数と種類を多くすると共に、参加希望者を学科や課程に限らず、

自由に受け入れた。そのために参加人数が数十人を越えるまでに急増し多くのこと（参加者の輸送手段、実施場所、指導者、指導内容、宿泊場所、食事、道具、使用機器の種類と数など）に支障を生じる結果となってきた。そのため筆者等は土日指導の負担が増してきたが、労を厭わずに同じ内容の事業を2～3回に分けて実施する様にした。しかし、実習内容によっては時期を逃がしたり天気恵まれなかったりで参加した時により学生間で差が生じることとなった。そのため実習内容を固定し多くの学生が参加できる事業にすることを余儀なくされた。

丁度その時、文部科学省は平成9（1997）年から教員養成系学部にはF S事業予算を計上した。そのため筆者等は10年以上前から各種事業を実施してきたこともあり簡単に事業計画を作成し予算を申請した<sup>3)</sup>。その結果、数百万円の示達があり年に20回（通算日数にして50日）程の事業を筆者を含む4人で実施した。それまでの費用は全て参加者負担であったが、以後は飲食を除き公費で賄われ、表2に示すような多くの体験事業を開くことができた（その頃の事業に参加した学生達の感想などを後に示す）。

この事業は大学の目玉となり、全国の大学から大分大学方式のF S事業とまで言われ、実施方法や内容などの問い合わせが集中した<sup>3)</sup>。その様な話題を集めたこともあり、指導や実施主体を筆者等個人から学部主催（F S委員会）事業に変更した。それ故、筆者等はその後事業をF S委員会に委ねたが、委員会は毎年同じ事業を年に数回開くだけとなった。

それ故、筆者等は新たな体験事業を別に開いて現在に至っている。それへの参加者数は10～20人程で、各種事業を季節や場所に応じて開くために飽きがなく好評である。（しかし、F S委員会は引き継ぎ後、新たな事業や方法での活動を行うことなく、毎年同じ内容で年に3～4回実施してきた。それ故、変化がなく画一的になってきたこともあり、最近参加者が減少し活動が悪くなっている）。この様に各種事業を実施するには内容や体験内容の種類や手法などに工夫をすれば、それなりの参加も多く、学生にも得るものが大きい。つまり、やり方次第で参加者は満足できるものとなる。だが、指導者の中にその体験内容を熟知した者が居ないと、とかく人任せとなり、意に添えないこと

も生じる。幸いに筆者等はそれを持っていたので簡単にできた。

特に児童生徒の居る家にホームステイを行えば、学生が家庭教師の役割をし、学校で理解できなかった箇所の補説や解説を行うなどの関わりを持たせたことにより、一層家族との交流が深まってくる。この様にホームステイ方式を採ったことで、学生の卒業後も家族的な付き合い（お祭りへの招待や特産品の送受、農繁期のボランティア、電話やメールによる不明箇所の指導や回答等）が続いている者さえいる。

また、学生は素人と言えども20歳前後の若者であるため、動きも良く参加人数が多いこともあり結構な仕事量となり、高齢化した山村では貴重な労働力になっている。例えば傾斜15~20度の1haの斜面に1.8m間隔で植林する場合、30人の学生であれば1日（6~7時間）の作業量である。その上、丁寧に植えるので95%以上の活着率である。因みにプロは1日に200本程を植栽するが、活着率は70%位だという。それ故、枯れた所には必ず補植しなければならないが、学生の場合その手間が省ける等の利点もある。

また体験事業に参加することによって、地域で培われた様々な生活の知恵が何回か参加しておれば村人や指導者から伝授され、次第に忘れかけていた一つの文化が次に伝わることにもなる。これまでに多くの知恵を実習先で伝授されて来た結果、それが先輩から後輩へ伝わり、各地や色々な場面で生きている。

参加者は公民館や学校、時には大型のブルーシートと現地の竹を用いて簡易テントとし（10m×10mだと20~30名が収容可）、寝食を共にすることがある。この時お互いの個性の再発見や協働作業での連携の大事さを身をもって感じる。また、準備や片づけなどの役割分担や作業手順の打ち合わせの大事さ、休憩の仕方や作業開始までの時間の使い方なども段々と身についていく。

更に物が無いか不足する場合、現地にある物での代用の方法等、臨機応変による対処の仕方も段々とできるようになる。これらの実践を通しての学習は、今後いつ生じるかも知れない天変地変（地震や台風など）の際、自分自身の身の守り方、水や食糧確保の仕方や現地にある物を使っての簡易住まいなどにも対処できる力が備わっていくことになる。



図3 大学と村の交流10周年記念の森に看板を建てる参加者（2005年3月）

この他に経験の効果については、キーワード数や語彙数が体験者の方が明らかに多い等も本学会誌6号に報告してある<sup>7)</sup>。更に、これらの体験を持つ者が、その後教職に就き、学校で総合学習の授業をする場合、地域指導者との連携のとり方や関わり方が解っているので充実したものになっていく。だが、体験のない教師の場合は招いた指導者に任せっきりで自身はお客さんを決め込んでおり、児童生徒が騒ごうが暴れようが知らぬ顔、極端な場合はその場にはいない者さえいる。これについては本学会誌7号で述べた<sup>8)</sup>。この様に体験による効果は大きいですが、その良さを関心のない者にどう伝えるかが課題である。

余白の関係から略記するが、学生は授業や作業などの際、指導者と児童生徒を結ぶ上でも非常に大事な役目を担う。目には見えぬその力を如何に有効活用するかである。

## 2. 卒業生の感想と意見（原文のまま）

### 1) 真の生きる力とするために

別府市立青山中学校勤務 古川誠司

（平成8年3月卒業）

中学校教員となり早10年が経過した。最初の2年間は地元で臨時講師をした。今になってその前後を振り返ってみると、全く仕事らしい仕事ができなかった。当時の先輩教師には申し訳ない気持ちでいっぱいである。教諭として10年経ってある程度の自信もつてきた。やはり経験から得るものは大きいと改めて思う。

日々生徒と接する中でその経験不足に直面する。大人では考えられないことをし、考える。知っていて当然と思うことを知らない。以下に最近遭遇した幾つかの例を挙げる。

- ・総合の時間、切り出しナイフを使わせた。10名中5人が怪我をした。ナイフの使い方が極端に下手で切傷をする者、注意事項を守らず安全対策を怠った者などである。
- ・集団宿泊研修で飯盒炊飯をした。お焦げの部分を「癌になるから食べない」と言い出す。僅かに黄色くなっているだけで炭化しているわけではない。健康志向も程度が。
- ・雨の日にグラウンドが使えない時、一緒に五目並べをしようと思つかけると、5名中4名がルールや戦術（四三を作れば勝ち、先手は三三はだめとか）を知らなかった。普段からテレビゲームしかやってないと思われる。それを教えると、教室中がブームになるほど盛り上がってきた。
- ・中学校3年生の生徒が蟬の抜け殻をもって来て、「先生、これ何？」と聞いてきた。
- ・箸を上手に使えない生徒が多い。スプーンで暮らしてきたのか。
- ・天気 of 授業をしているとき、天気に関する諺を話題に上げてほとんど知らない。「天気はTVの天気予報が教えてくれる」といった感覚である。

これらは「以前と環境が違う」で片付けることもできるかもしれないが、余りにもひどい。

確かに今の生徒はその環境の違いで、私たちが子どもの頃にしていないことも多く経験しているであろう。中には大人より上手に携帯電話を操作する者も数多い。また、コンピュータ、インターネットの普及により、多くの情報を瞬時に集めることができ、外国に友人がいるという生徒さえいる。しかし、その大半の子どもは道具を使えるだけで、その構造や原理に興味を示さない。ふと「この子たちは便利な道具を与えられなければ、何もできないのではないか。自分で考えることをやめているのではないか」と言う思いがよぎり、不安になる。

私が小学生頃に叔母の家へ行った時、TVのチャンネルが線も繋がっていないのに操作できるいわゆる「リモコン」を初めて見て感動した。兄と2人で調べて実

験をしてみたりした。当然理屈を理解できたわけではないが、私がりモコンに感動したのは、それが当たり前ではない時代を知っているからである。今の生徒たちはこの手の「感動経験」や「探究心」が少ないのでは、と考えることがある。何かに対して興味を持つには、もっと人間の生活の基本的な部分を知る必要があるのではないか。知って、初めて見えてくるのが非常に多いからだ。

そのような理由から、教員は生徒達に多くの体験を積ませることが急務であると思う。しかし、その教員自身も時代と共に体験の少ない者が増えてきている。生徒以上に始末の悪い現実がある。憂うべきことである。その点、大学時代に独自の手法で実施していた体験活動に参加でき、多くの経験を積めたことは今考えしてみると大変意義深い。



図4 蕎麦の種を蒔くための畝作りと  
左下は1ヶ月後に咲いた秋蕎麦の花

私の勤務校は総合的な学習の時間を「ものづくり講座」と称している。外部からの講師を招き、その道のエキスパートから学んでいる。野菜作り、木工、料理、竹細工、写真等である。教員も各講座を担当し、外部講師と一緒に子どもたちを指導している。今思えば、この「ものづくり講座」でしていることは、幸運にもほとんど大学時代に経験することができた。したがって、TTとして自信を持って教えることができています。また、経験の薄い講座については生徒と共に再び学び、それが自信に繋がっている。総合的な学習の時間が教育課程に位置づけられている限り「ものづくり講座」も続くだろう。来年は外部講師に頼らず、自分の経験



したことを伝えられる講座を独自で開いてみたいと思っている。

思い出してみれば稲の栽培、キャベツの栽培から販売、茅葺き小屋作り、海水からの塩の製造と精製、トコロテン作り、魚の干物づくり、植林、下草刈り、間伐や枝打ち、間伐材の加工、椎茸栽培など、大学時代に体験した。その中、半年以上連続しての関わりは、田を借りて1年間にわたって一連の作業（田おこし、種まき、田植え、水管理、草取り、水抜き、収穫、乾燥、脱穀、加工など）である。この時は米だけでなく粳穀や藁の各種加工や利用までやった。ここではただやってみるだけでなく、気温、湿度、水温、日照量、分株数、雑草の大きさや種類、一緒に生息する動物の種類と数、生長量など科学的な面からの観測も毎日定時に行い、農業改良普及所の方がその観測データ等の各種資料を貰いに来た。そしてその裏作にキャベツの栽培を無農薬で行い、3000余個を販売までした。

これも大学時代であったからできたものであろうが、真の生きる力をつけるため、その基になる「様々な実体験」をより多くの生徒達にも積んで欲しいと願っている。

## 2) 行政職員として

長崎市役所勤務 石橋真弓  
(平成10年3月卒業)

私は大分大学教育学部在学中に「単位にはならないが色々な事をやるのよ」と友人から聞いて参加し始めた体験活動であった。それが行政職員として生きていく中で「何でもやってきたのでやれる」という大きな支え（自信）となっている。

在学中、私は福岡県星野村での山の手入れ(山拵え、植林、下草刈り、枝打ち、間伐、運搬、乾燥、木材加工)、大分県豊後高田市香々地町における農業(整地、種蒔や植えつけ、間引き、誘引、除草、除虫、収穫、選別、加工、販売)や塩づくりなどの様々な事業に積極的に参加した。そうすることでこれまでやったことのない色々なことを経験でき、それによる多くの得るものがあった。この時期が大学でのフレンドシップ(FS)事業の始まりであったことも幸いした。

FS事業に参加するまでは下宿と学校の往復を繰り返し、机上の学問だけの生活を送っていたが、この事

業に出たことで、室内だけでは得ることができない様々なことを体(五感)を通して学ぶことができた。また、これに参加した最大の収穫は「臨機応変に生きることの大切さ」と「自然体で生きることの良さ」を実感することができ、その類の人々や友人に出会えたことだった。

自分の五感で感じた「良さ」は、教科書や参考書で学んだ知識とは違い、時を経た今でも私の心と体にしっかり根づいている。就職して11年目。琴海町は3年前の市町村合併で「長崎市」となった。人口約1.2万人の琴海町に8年弱、その後人口約45万人の長崎市になって3年余勤めている。行政という仕事柄、何事も四角四面に考えてしまいがちではあるが、様々な業務があるため内容によっては、自分の中で「臨機応変に対応できないだろうか？」を自問自答しながら今日まで携わってきた。全てにおいてその様に対応できたかというところではないが、色々考えることで、見通しを立てて仕事に臨むことができるようになったと言える。さらに、市町村合併を機に職場も仕事も人間関係も大きく変わったが、それでもその変化に一社会人として順応できているのは、FS事業の中で色々な場面にあった対応の仕方を学び、やってきたおかげだと感謝している。

FS事業は行政職の道に進んだ私にとって、一社会人として生きていく中で今でも大きな支えとなっている。つまり、FS事業は体験を通して、五感で感じたこと、考えたことを契機として、人としての生き方、考え方を見つめる良い機会となった。また、地域の方々、参加した仲間と接する中で、よりよい人間関係の築き方を自然と身につけることもできた。そういう意味でFS事業は「人生学」と言うこともできる。今後はこの「人生学」を大学だけで取り上げるのではなく、高等学校など義務教育課程における授業の必須科目とし、やがて、社会人となる若者たちの生き方の方向付け的役割を担って欲しいと切望している今頃です。

## 3) 10年間体験事業に参加して

福岡県ちくご市立千年小学校勤務 伊東勇治  
(平成13年3月卒業)

私が体験作業に参加するようになって今年で10年目になる。振り返ればこれまでに数えられぬ程の多種

多様な作業体験をさせてもらった。お陰で勤務先では何事にも臆することなくやれる自信と手法を得てきた。そのせいか10年以上の先輩教師からも「これどうするの」と聞かれたり教を請われたりすることすらある。

でも最初の頃は枝打ちや下草刈り作業はなぜするのか。どんな意味があるのか等全く解らなかつた。また、その時に使用する鉋や鎌など今まで持ったり扱ったことのない私にとっては、初めての道具であり何にどう使うのかさえ判らなかつた。私がこの体験作業に参加する契機になったのは先輩や友人の薦めである。今では多くの得るものがあり、改めてこの作業の機会が個人的であったが、大学内で企画されていたことを嬉しく思う。これに参加できたことで自分自身を磨き、学科や学年を越えた仲間達との交流、多くの地域に住む名人達人と言われる方々と知り合いになれていることに感謝している。

思い出せば初めての作業は星野村での植林であった。それは朝早く山の入り口から背に重い苗木を担いで、右手に作業用の鉋を、左手には間隔を測る1.8mの竹棒を持ち、道なき急傾斜の山道を上り下りしながら植栽地まで黙々と歩いた。1時間余かかってやっと現地に着けば休憩する時間などさほどなく、とにかくひたすら夕方まで穴を掘り、植え込み作業をした。その時に食べた弁当や水の美味しかったことと途中の休憩は何物にも言い難い。でもその作業は普段体を動かさない私にとっては非常に過酷であった。

私たちはいつも作業後、山側でブルーシートを使った仮設テントか公民館を借りて、参加した学生や卒業生だけでなく、地域の方々と酒を交わしながら親睦を深めた。その中で、上述の気持ちを払拭させたのは村で林業を営んでいる方々の思いや生きざまを知ってからであった。現在、山林を保有していても木材価格の下落で苗木代、下草刈りや枝打ち、間伐などにかかる費用の方が多からだという。しかし、地球環境（水や空気の浄化）の保持に重要なはたらきを持っているので放棄するわけにはいかない。そんな気持ちで現在も山の維持作業を続けているというから、何と大きな考えの人達だろうと思う。

それらの話しの中から林業の大切さ、山を守る意味など、我々人間が現在豊かに生活できる理由の一つが森林のおかげであることも解った。例えば、森林から

木が切り出され、木材にしたり、木材を加工した紙を利用をしたりすること。今までの自分にとって、割り箸やコピー用紙などは当たり前のものだと考えていた。他にも、森林が緑のダムと言われる理由を現地に赴き自らの眼で見、体験を通して実感した結果、樹木のおかげで自分たちが生活できているという意識を持てるようになった。

このように森林を守る取り組みをしていくことで、広い視野を持って物事に取り組めるようになった。と共に卒業後はこの体験作業への参加が契機となり星野村の小学校で臨時講師として1年間勤務した。

そして2年目、運良く教員採用試験に合格し教諭として小学校に勤めてからもこの意識が変わることはない。見かけ上やっていることは違っても子供達と接することと森林を育てていくことはどこか近似している。長い目で見つつ時折手助け（下草刈りや間伐などの手入れと同様に、個にあった指導）をしなければ木も子供も育たない。だからこそ、この教育に理想を持って関わっているのだと。

教師になって早8年目。それでも時間を見つけては年に数回、星野村での体験事業に参加して、自身の技術の習得と研鑽を重ねながら、後輩達に自信を待って経験をすることの大切さを啓発し続けている。これを通して自らは更なる体験研修を行い、日本や世界を担う子どもたちの教育に精進していきたいと思っている。

#### IV. 結び

最初は20年程前に学生の経験不足から派生する各種トラブルを解消するために開始したこの体験活動であった。今ではそのための実施の方法や手法も確立されてきた。その事業を地道に継続することにより、これまで述べてきたような予期せぬ様々なものが多く得られた。

更に、本稿以前に実施した各種調査<sup>5,7)</sup>や今回の参加者の意見と感想などから判るように、この体験活動は単に学生時代だけでなく、卒業後社会人となってからも色々な面や機会に役立っていることもはっきりした。否、むしろその方が大きいかも知れない。現在実施しているこの種の体験活動は単にやり方が判り実際にできる（やれる）だけでなく、それが契機となり技術の向上や応用、学生や卒業生同士だけでなく、各種指導

者や名人達人等との人間関係の構築に繋がっている。それが次の事業展開や支援が欲しい場合など、直ぐに対応できる。特に、教師として学校へ就職した場合、環境教育や総合学習の時間などにも臆することなく取り組め、その時間の有効活用に事欠かない等もある。しかし、平成20(2008)年に告示された学習指導要領によれば、それらの時間は減少傾向にある。特にPISA等の各種調査から児童生徒の学力低下が指摘されたことにより、知識偏重へと転換し始めた兆しもある。折角、生きる力を育むためにと始まった総合学習の時間までも縮小している。その中で本学会はその重要性の啓発に向けて動いているが、まだ道半ばであり、賛同者も少ない。どの様な形で関わっていくかが今後の大きな課題であろう。

筆者等が実施するこの体験事業の場合は希望者だけの参加であるから、何事をするにも非常に積極的である。しかし、参加意志のない学生にこの体験の重要性をどう認識させ、行ってみよう、やってみようとする気にさせるかが今後の課題でもある。

#### 参考文献

- 1) 広井禎：物理教育 31(4) 240-245 (1983)
- 2) 軸丸勇士：児童・生徒・学生の学習実態—大分県下1.1万人の調査から— (1996自費出版)  
：大分大学教育学部研究紀要 20(2) 277-283 (1998)
- 3) 大分大学教育学部：平成9、10、11年度フレンドシップ事業報告書 (1997-1999)
- 4) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/sonota/071205/001.pdf)
- 5) 軸丸勇士他：日本生活体験学習学会誌 第6号 29-42 (2006)
- 6) 農文協：地域ぐるみグリーン・ツーリズム運営の手引き (2002農文協)
- 7) 伊藤安浩他：日本生活体験学習学会誌 第6号 43-53 (2006)
- 8) 軸丸勇士他：日本生活体験学習学会誌 第7号 17-28 (2007)